になり、興味深い史実そのものはとらえられても、その間の連続した歴史的過程がとらえられずに現実から浮きあがってしまい事実だけが一人歩きしてしまうきらいがある。

そうかといって史実のみをまんべんなく並べて骨格を構成してもそこには面白さというか、特殊性というか、甲府市の個性はあらわれてこない。このことは当然史実に対する筆者の価値観ともからまる問題である。

近現代、特に現代の史実を事実として分析するにあたってはどこまでが歴史的事実であり、どこからが価値観に関する立場、部門であるかの判定はきわめて困難である。

現代における通史としては歴史的現実、つまり資料をして真実を悟らせる立場をつらぬくべきであろう。だがその外に甲府市の歴史にみられる特殊な条件、あるいはこれの歴史的展開が興味深い史実として読者にうったえるところがあればそれはそれで意味があるとは考えるのだが、完全に史実、歴史となっていない現段階ではそれでは普遍性を欠くものといわれかねない。この両者の相関について苦しんだというのが私のいつわらぬ告白である。次の百年史が編纂されるとき、現在の甲府市史百年史近現代編が完全に史実となったときを思うと責任の重さに慄然とする次第である。

（市史編さんを終えて）

専門委員　新藤昭良

甲府市史は、甲府市制一〇〇周年を記念し史料編を包括した本市初の企画で、かつ、民衆史的在り方を前提として編纂された画期的事業であります。

私は、昭和五十八年、編纂に着手の際、市助役の立場で甲府市史編纂委員会副委員長を任命され、磯貝委員長はじめ委員諸先生方のご尽力を頂き編纂が軌道に乗る見通しを得ることが出来、心から敬意と感謝をいたしたのであります。六十二年、任期満了による退任後、引続き市長から、専門委員として執筆の委嘱をうけ「現代編」を担当することになりました。戦後の混沌とした社会から安定へ、そして発展・飛躍へと向かう甲府市の姿を紀として綴る意義あるこの事業に一片の貢献が出来ればと思い改めて参画させていただきました。

戦後行政は、サービス行政として「揺り籠から墓場まで」と言われてきました。従って政治、経済、社会の殆どが行政との関わりがあるため、既刊の市史は行政史としての性格が濃いものでありました。民衆史としての市史を執筆するにあたっては市民の側からの観点に務めるとともに、その他幾つかの課題がありました。特に、現代は何時までが史紀なのか、何が史紀として妥当なのか、執筆の限界はどうかなど難しいものがありましたが委員の先生方の協議により一定の方向が確立され、この度編纂が完了いたしたことは誠にご同慶にたえないところであります。また、事務局の皆さんのご尽力に感謝するとともに、次の市史編纂のため史資料保存システムを体系化されんことを要請申しあげるものであります。

市史編纂と私

専門委員　松本武秀

甲府市史の編纂には文芸と教育の事項の記述にかかわったが、二